〈資料紹介〉芳賀矢一「日本童話の淵源」

Haga Yaichi's "The Origins of Japanese Fairy-Tales"

杉山和也
Kazuya SUGIYAMA

はじめに

本稿で紹介する論考「日本童話の淵源」の執筆者、芳賀矢一（一八六七―一九二七）は、ドイツ〈文献学（フィロロギー）〉を導入し、近代的な学問としての「国文学」を樹立したとされる人物である。芳賀の影響は現在の「国文学」という学問領域のみならず、今日の「国語」の在り方や「国語教育」に至るまで大きく及んでいる。

当資料は芳賀がドイツへ留学する直前にあたる時期に執筆されたものである。当資料は、芳賀の国文学観や国語教育観の形成動向を探る上で重要であり、国文学研究史の上でも、教育史の上でも注目されるべき内容のものである。しかし、当資料が掲載されている雑誌が希少本で、閲覧が困難な状況にあるためか、残念ながら従来の研究では取り上げられてこなかった。したがって、本稿を以て翻刻紹介をする次第である（1）。

一、掲載誌『教育』について

当資料は、雑誌『教育』の第四号（一九〇〇年（明治三三）六月）、及び第五号（一九〇〇年七月）に分割掲載されている。『教育』は、一九〇〇年三月に創刊した「茗渓会」が発行する雑誌である（2）。茗渓会は一八八二年四月に、当時の東京師範学校卒業生によって東京茗渓会として設立され、一九〇〇年五月には社団法人茗渓会となっている。創刊号では、杉浦重剛（一八五五―一九二四）、嘉納治五郎（一八六〇―一九三八）、伊沢修二（一八五一―一九一七）の他、芳賀に近しい上田万年（一八六七―一九三七）や、東京高等師範学校卒業生の三土忠造（一八七一―一九四八）、乙竹岩造（一八七五―一九五二）らも執筆者として名を連ねている。

同誌はその後、一九五九（昭和三四）年七月発行の八三一号まで刊行が続けられている。ここにその誌史の全体像を紹介する用意は無いが、差し当り当資料掲載と関わる時期の第一号から第五号までの書誌情報を以下に紹介しておきたい。同誌は毎月一回、各月三日に発行。活版印刷。冊子は縦二四・三糎×横一六・七糎。定価、一〇銭。発行兼編輯者は「江崎政芳」（東京市本郷区元町二丁目六十六番地）。印刷者は「大橋又四郎」（東京市本郷区上富士前町二十番地）。発行所は「茗渓会事務所」（東京市本郷区元町二丁目六十六番地）となっており、所在地が江崎の住所と一致している。発売所は第一号から第三号までが「少年園営業部」（東京市神田区南甲賀町八番地）。第四号からは「内外出版協会」となっているが、所在地は「少年園営業部」のそれと変わりがない。印刷所は第一号が「株式会社秀英舎第一工場」（東京市牛込区市ヶ谷一丁目十二番地）、第二号と第三号は「ジャパン、タイムス社」（東京市麹町区内幸町一丁目五番地）、第四号と第五号は「晩翠社」（東京市神田区佐久間町三丁目二十一番地）。印刷日は各月の二日となっている。広告取次所は博報堂（東京市神田区末広町一番地）である。

なお、誌面は「時論」「学術実験」「漫録」「彙報」という四つの区分から構成されており、当該論考は第四号、第五号のいずれに於いても「学術実験」の区分に掲載されている。

二、当資料の論旨

当資料で芳賀は先ず、グリム兄弟の童話研究を紹介しつつ、日本の各地に伝わる童話・伝説が身分や階級に関わらず共有される国民文学であると位置付ける。「近来我国の教育者、往々童話の価値を認め、童話読本の世に出づるもの亦随つて多し。これ実に喜ぶべき現象といふべし」として、童話が近来、教材として広く用いられている状況を評価した上で、その研究の必要性を訴える。

そして以下、その実践として芳賀は、桃太郎、猿蟹合戦、かちかち山、舌切雀、花咲爺の五話を取り上げ、これらの童話についてそれぞれ検討を加えている。芳賀は童話には神代紀にその淵源を求められる要素があると主張する。そして、この主張を前提にこれら五話について、各時代に通用した信仰や思想を照らし合せ、記紀以来の要素と記紀より後代の要素を選別。さらに、漢籍仏典との比較を行い外来要素を選別し、日本古来の要素を抽出するという方法を採って論を進めている。そして、この検討を踏まえて、童話・伝説の収集とその国際的比較研究の価値と必要性を主張し、童話研究の勃興を提言している。

また他方で、芳賀はこれらの童話について、それぞれ教材としての有用性についての評価も下している。桃太郎、猿蟹合戦、かちかち山については「いづれも武勇復仇の談にして、童女よりも童男に適せり。其中に含有せる道徳は、義勇これなり」と述べ、「舌切雀、花咲爺に於ては、慈仁の訓あり、物羨の誡あり、之を前の三話と対照するに、比較的に女子的なり」と位置付けている。

三、国語教育史上の意義

（一）教科書と芳賀矢一

従来の国文学研究史研究では意識が希薄になりがちなことだが、教育もまた芳賀の関心領域の一つであった(3)。一八九〇年には、芳賀矢一・立花銑三郎編・上田万年閲『国文学読本』（冨山房）が刊行されているが、その例言には「一。此書は読者をして粗々国文学の通観を得せしめん事を期し、専ら教育上、並に文学上の目的を以て編纂せり。」(4)と見え、「教育」が同書編纂の主な目的の一つとして掲げられている。芳賀はまた、一八九七年には、中等向けの国史の教科書として『新撰帝国史要』上・下巻（冨山房）を刊行している。さらに翌年には、三土忠造著・芳賀矢一閲という形で『中等国文典』上・中・下巻（冨山房、一八九八年）にも関わっている。以上から芳賀は、留学前から教育に対する強い意識を持っていたと見て良いであろう。

芳賀は一九〇〇年九月八日に出国し、ドイツでの約一年半の留学生活を経て一九〇二年八月二四日に帰国した。芳賀が帰国したこの年、教科書会社と教科書採択委員であった県知事、県会議長、小学校長などの間での全国的な贈収賄が発覚する事件があった。そして、この所謂、教科書疑獄事件を契機として教科書の国定化が推進され、翌一九〇四年からは第一期の国定教科書が使用されることとなった。芳賀は、第一期国定教科書である『高等小学読本』（一九〇三年）の編集顧問の一人として名を連ねている。さらに、一九〇八年には、義務教育期間が四年から六年に延長されたことに伴い、新たな『尋常小学読本』が編纂されることとなり、芳賀は三土忠造、乙竹岩造とともに起草委員を命じられている。第二期国定のこの教科書は「ハタタコ」読本と通称され、一九一〇年から一九一七（大正六）年まで使用された。当教科書では、「韻文ハ第一巻ニ一、第二巻ニ二、第三巻以上ハ各三ヲ収メタリ。初年級ニ於テハ口語体ニヨリ、上級ニ及ビテ漸次文語体ヲ用ヒタリ」（文部省『修正国定教科書編纂趣意書』国定教科書共同販売所、一九一〇年、一九頁）というように教材の採択と配列に系統的かつ段階的な配慮が為されている点に一つの特徴がある。また、当教科書は第一期国定教科書『尋常小学読本』（通称「イエスシ」読本）と比較すると、新たに「桃太郎」「花咲爺」「因幡ノ白兎」「天岩戸」などの童話・伝説が取り入れられていることもまた特徴の一つとして指摘できる(5)。このことについて『修正国定教科書編纂趣意書』（二〇―二一頁）には次のように見える。

> 多クノ国民的童話・伝説ヲ加ヘタルコトモ亦新読本ノ一特色トスル所ナリ。第一巻ヨリ桃太郎・猿蟹合戦・牛若弁慶・瘤取、餅ノ的、天神様・花咲爺・野見宿禰・義家・浦島太郎・仁田四郎・因幡ノ白兎、那須与一・小子部螺嬴、鵜越の坂落（ママ）し、天岩戸・釜盗人等、人口ニ膾炙シテ趣味アル説話ヲ加入シタリ。

この方針には芳賀が深く関わっていたと考えられる。すなわち、当資料は、第二期国定教科書の童話教材採択に当たっての芳賀の採択基準を推す上でも恰好の内容を有しているとも言えよう。芳賀は「国語読本編纂につきて」（『北海之教育』第二三一号、一九一二年四月）で次のように述べている。

> 国語教育は語法教育となりてはならぬ、趣味を覚えさせねばならぬ、国民的精神を養ふのが最も肝要である、伝説趣味を吹き込まれなければならぬ、随て理解的なるを避けた、文章に於ても変化を多くしようと試み趣味を加へた、（中略）材料としては国民的のものを採り度いと云ふ考へで、主として日本的趣味に富る様にした、（中略）国民的材料は国民的意味を授くるのである　九巻以上には訓示の課を入るゝことが出来た、抽象的訓戒を入れ、四学年以下には作り話をおいた、地理、歴史の材料は九十十一十二は地歴の材料をとりて連絡を保つ様にし、読本にも時代を追ふて歴史の進歩と伴ふと云ふ積りである

ここに芳賀の述べる第二期国定教科書の方針について、山本康治は一八九〇年代以降に日本の教育学界の中核を担うようになったヨハン・フリードリヒ・ヘルバルト（Johann Friedrich Herbart, 1776 - 1841）の学派の教育学の影響を指摘する（6）。この教育学は、当時の日本では例えば次のような形で理解されていた。

> 道徳的陶治の目的の為めにする教科目は修身科、歴史科を主とし、国語読本中の道徳的事項、地理科中の国民精神を養成すべき事項、唱歌科の道徳的歌詞等とす。（立柄教俊『国民教育原理　実用教育学』目黒書店、一九一〇年、一〇五頁）

> ヘルバルト派に於ては人類開化の進歩と一個人の発達とが相一致すとの考に基づき、人類開化の歴史的段階を一個人発達の段階に適合せしめんと計れり。所謂、開化史的段階法是なり。此の法に於ては小学校の初学年には昔話や人類開化の初期に属する史談を授け、他の科目に於ても之に連関するものを取り、次第に進みて小学校の第八学年に至れば近代の歴史と現今の進歩に於ける諸学科とを授くるなり。（立柄教俊『国民教育原理　実用教育学』目黒書店、一九一〇年、一〇九頁）

これらは、ヘルバルト派の教育学者ツィラー（T. Ziller, 1817-1882）やライン（W. Rein, 1847-1929）の唱えた「中心統合法」、「開化史的段階説」を踏まえたものである。徳育を重んじ強固な人格形成を目的としたもので、「中心統合法」は各教科を統合し連絡して、国家の歴史を中心に置く方法。「開化史的段階説」は個人の発達を文明の発達と同一と捉える考え方のことである。そして、この教育

理論では、これらを根本原理として「情操教材」を活用しつつ、美感による品性の陶冶をすることが目指された。「情操教材」とは、具体的には郷土的民族的歴史、物語、童話が挙げられる。地理歴史などと連絡する形を採っている点、昔話などの教材を採用し、発達段階的に学年を追って採用するとしている点など、確かに芳賀の方針とかなり重なっていよう。すなわち、芳賀が「国民的精神」を養う目的で第二期国定教科書に多くの「国民的童話・伝説」を取り入れたことも、こうしたヘルバルト派教育学の教育理論に則ったものであったと見ることができる。

（二）ヘルバルト派教育学と芳賀矢一

芳賀がヘルバルト派教育学を享受したのはいつごろのことであったのだろうか。本稿で紹介する資料は、ドイツ留学前に執筆された論考である。この時期には既にヘルバルト派教育学は日本の教育学界で広く受け入れられていた。当資料の掲載された『教育』第五号に於いても、乙竹岩造が「童話問題」と題した論考を執筆しており、童話の教材としての有効性について説いているが、ここでも矢張りツィラーやラインへの言及があり、ヘルバルト派教育学の影響が顕著なのである。すなわち、当時の芳賀周辺の教育学者の動向や、当資料の存在を勘案するならば、芳賀はこの時期に既にヘルバルト派教育学を享受していたと見る方がむしろ自然であろう。すなわち、当資料の存在によって、芳賀が留学中のドイツに於いてではなく、留学する前に日本に於いて享受していた可能性が高いと考えられる。しかし、そうであるとすると、芳賀はどのような径路でこの教育学を享受し得ていたのだろうか。

ヘルバルト派教育学を初めて本格的に日本にもたらしたのは、帝国大学で教鞭を執ったドイツ人講師、エミール・ハウスクネヒト（Emil Hausknecht, 1853-1927）であった(7)。ハウスクネヒトは一八八七年一月に来日し、帝国大学のドイツ語学、及び教育学の講師として着任。一八八九年二月には、ハウスクネヒトの提言により帝国大学文科大学に「特約教育学科」という特別の課程が置かれた。なお、特約生に対する普通講義は文科大学生との共通授業であったので、後述の特約生の他に文科大学生であった沢柳政太郎、太瀬甚太郎、湯原元一、尾原良太郎らもハウスクネヒトの講義を受講していた。翌一八九〇年七月には一二人の特約生がその課程を修了し、ハウスクネヒトは同月に帰国した。修了者は福島本勝、菅沼岩蔵、田中義五郎、木村牧、本荘太一郎、谷本富、稲垣末松、松井簡治、岡田五兎、荒井甲子三郎、米山長太郎、山口小太郎であった。この課程は、この時を以て廃止となり、帝国大学には以後、類似の課程が置かれることも無かったが、ハウスクネヒトのもたらした教育学、教授理論は門下生たちによって積極的に広められ、日本の教育界に多大な影響を及ぼすこととなった。そして、そのハウスクネヒトが携えていた教育学こそが、ヘルバルト派のそれに他ならなかったのである。

ヘルバルト派教育学の享受とその影響は、実はこの時期に既に芳賀の周辺でも確認することができる。先に述べた『国文学読本』（一八九〇年）を芳賀と共に編纂した立花銑三郎（一八六七―一九〇一）も、ヘルバルト派の学徒ケルン（H. Kern, 1820-1891）の著作の訳書である『格氏普通教育』（冨山房書店、一八八二年）と『格氏特殊教育学』（冨山房書店、一八八三年）の翻訳に関わっているのである。立花銑三郎は東京大学予備門以来の同級であった(8)。また両書はハウスクネヒトの門下生の一人であった沢柳政太郎（一八六五―一九二七）との共訳であるが、沢柳は上田万年と東京府第一中学校以来の学友であった(9)。そして、芳賀と親しい間柄にあった藤代禎輔（一八六八―一九二七）もまた、一八九六年に、ヘルバルト自身の著書を翻訳した『独逸ヘルバルト教育学』（成美堂）を刊行している。加えて、上田も、彼のドイツ留学前にあたる一八八九年に『おほかみ〈独逸グリム氏原著〉』を刊行している(10)。上田の当書を含め、日本でのグリム童話翻訳最初期には、元々代表的とは言えない「狼と七匹の小山羊」の一話だけが選ばれて矢継ぎ早に出版されたのである。この現象もヘルバルト派教育学の影響に拠るものと考えられるのである(11)。

芳賀がこうした東京帝国大学での学友たちとの交流を通して、一八九〇年代の段階でヘルバルト派教育学を享受していた可能性はかなり高いと言える。したがって、芳賀のグリム童話、メルヒェン及びその研究の享受を考える上でも、ハウスクネヒトとその門下生が巻き起こしたヘルバルト主義運動を背景の一つとして考える必要があろう。

四、国文学研究史上の意義

冒頭にも述べたが、当資料は国文学研究史の上でも注目されるべきものと言える。芳賀はドイツ〈文献学（フィロロギー）〉を導入し、近代的な学問としての「国文学」の樹立を果たした人物とされているが、その一領域として説話（童話・伝説）を文学と位置付けて、積極的に研究を行っており、これもまた後世の学問の在り方に大きな影響を与えているのである。そして、当資料は、芳賀の中で説話研究が確立する経緯を考察する上で重要な資料であると言える。また同時に、当資料は近代日本に於ける説話研究の形成を考える上で重要な資料であるとも言える。

芳賀が説話を研究対象として扱った論は、ドイツ留学からの帰国後に多く見られる。「地名伝説について」（『史学雑誌』第一六編第六号・第一〇号、一九〇五年六月・一〇月）や「今昔物語中の犬」（『帝国文学』第一六巻第一、一九一〇年一月）など、伝説や迷信、諺といった口碑文芸を扱った論を積極的に行っていた。また、他方で芳賀は東京帝国大学で「日本国民伝説史」（一九〇六年九月～一九〇七年七月）と題した講義も行っている。この講義について当時の受講生の一人であった鳥居龍蔵は次のように回想している。

これまで我が国の歴史家、国学者などの敢て資料とせず、捨て顧みなかつた「記」「紀」の或文から「祝詞」「霊異記」「今昔物語」「風土記」「万葉集」等を始め、すべての物語等から右の諸資料をよく引用調理し、これを学的に組織し、一大国民伝説史を形成せられたもので、這は誠に堂々たるものであつた。人の捨て、顧みない伝説の断片でも、一度博士の眼に触れ、耳に達すると、これが忽ち立派な学的存在物となつて現はれるのであつて、博士の同講義に於て最も偉い所もまさにここにあつた。これまで我が国に於て伝説を取扱つてゐた学者は絶対にないとは云へないが、博士の右の講義の如き正しい確かな学的システムの立つた国民伝説史はなかつたのである。この講義以前のものは、概ね一種の漫談、随筆類に過ぎなかつた。（鳥居龍蔵「芳賀先生と私」『国漢』第三〇号、一九三六年一二月）

芳賀が国文学として説話を取り上げて、研究対象とし学的に組織することが、当時としては斬新なものであったと捉えられている。

一九〇五年一一月には、文部省普通学務局が「童話伝説俗謡等調査」を実施し、童話・伝説・俗謡などを各府県に報告させているが、実はこの企画の提案にも調査にも、芳賀が深く関わっていたと見られる(12)。つまり、芳賀の説話研究は国家事業ともなっていったわけである。

また他方で、一九〇三年頃から取り掛かり始めた『攷証今昔物語集』上・中・下巻（一九一三年・一九一四年・一九二一年）も、芳賀の説話研究の業績として極めて重要なものである(13)。『今昔物語集』（以下、『今昔』）は現代では代表的な古典作品の一つとされている。しかし同書は一二世紀前半に成立した後、埋もれてしまいほとんど流布しなかった。現代に連なる『今昔』の研究や享受、流通の在り方が決定づけられたのは近代においてである。そしてこの近代での『今昔』〈再発見〉の動きにおいて研究の側から重要な役割を果たしたのが芳賀なのである。明治中盤には『今昔』は文学作品として充分には評価されず、研究対象としても扱われてこなかったが、芳賀の『攷証今昔物語集』を以て状況は大きく転換した。芳賀は同書序文に於いて、

ジヤータカやパンチヤタントラと同じく日本の古文学中に此の世界の珍宝あるを喜び、我が国唯一の古説話集として、かばかり尨然たる一大典籍の存在することに就いて、宇治亜相に感謝するの念を禁じ得ない。（芳賀矢一『攷証今昔物語集』上巻、冨山房、一九一三年六月、二九頁）

として『今昔』を世界的に見ても価値の高い古説話集であると位置付け、世界の珍宝とまで評価した。そしてその上で、校訂本文の提供と各話の出典・類話考証を行った。近代の『今昔』研究の基盤がこの書によってなされたといっても過言ではなく、同書の研究史上

の意義は今なお大きい。

ところで、西尾光一は、この芳賀による『今昔』〈再発見〉について、次のように述べている。

『今昔物語』が文学作品として注目され、それにふさわしい研究がなされ始めたのは、明治の末年から大正へかけての時期であつた。（中略）同書（杉山注：『攷証今昔物語集』）において芳賀が明治三十二年の（A）『国文学史十講』以来の評価を大きく変えて、『今昔』を日本文学ばかりでなく「世界文学の珍宝」と言い切つたのは、当代の指導的な研究者としての大きな見識であつたと思われるが、（B）そうした芳賀の価値発見は満三年にわたるドイツ留学の間に、ドイツ文献学を学び、ドイツ浪漫派やグリム兄弟の民話伝説研究の業績に接したことによつてもたらされたものと思われる。（西尾光一「今昔物語研究史 ――目録・その評価と解説――」『国文学 解釈と鑑賞』第二十四巻七号、一九五九年六月）

すなわち西尾は、留学前には芳賀は『今昔』に文学作品として充分な価値を見出せていなかった（傍線部（A））。しかし、芳賀はドイツ留学を通してドイツ〈文献学（フィロロギー）〉やグリム兄弟の民話伝説研究の理論とその方法を直接的に学び、これによって培った知見を基に初めて『今昔』を〈再発見〉するに至ったと捉えているようである。

そして、この見解は現在でも概ね通用している(14)。

しかし、竹村信治も既に指摘しているように、芳賀はドイツに留学をする前に、日本に於いて、ドイツ〈文献学（フィロロギー）〉にも、グリム兄弟の民話伝説研究の業績にも接していたのである。ただし、それが具体的にどの程度の享受し得ていたかについては、これまで明らかにされてはこなかった。この問題を検討する上で重要となるのが、当資料の存在に他ならない。

芳賀がグリム兄弟に言及した論文として早い時期のものに「言語学上のグリム氏法則に就きて」（『第一高等学校校友会雑誌』第六一号、一八九六年一一月）があるが、これは説話研究という訳ではない。また、留学前のもので芳賀の説話研究への関心が窺われる論文として早い時期のものとしては「古風土記の研究を望む」（『日本主義』第三九号、一八九九年一二月）があるが、内容は簡略である。当資料と同年に掲載された論文として、「国文学にあらはれたる狐」（『帝国文学』第六巻第二／第五、一九〇〇年二月／五月）があり、芳賀にとって初めての本格的な説話研究として重要であるが、グリム兄弟の民話伝説研究の業績への言及は認められない。したがって、当資料に於いてグリム兄弟の童話研究を紹介しつつ、日本の説話（童話・伝説）の収集とその国際的比較研究の意義について述べている点は重要である。そして、当資料で採られている研究の方法と目的もまた注目されるところである。実は芳賀の説話研究の意義付けと、目的、方法が、ドイツ留学から帰国の後の時期に於いても、

そう大きくは変わってはいないということが明らかになるからである。

例えば、次に挙げた「日本古代の童話伝説」（『筆にまかせて』日本書院、一九一八年(15)）という論は、芳賀の説話研究の成果をある程度まとまった形で書いたものであるが、箇々でも矢張り当資料と同様に、各時代に通用した信仰や思想を照らし合せ、記紀以来の要素と記紀より後代の要素を選別。さらに、漢籍仏典との比較を行い外来要素を選別し、日本古来の要素を抽出するという方法が採られている。そして、芳賀は次のように記している。

かういふ話はつまりその国民全体が作つたやうなもので、国民の空想力の産物であります。それで其の国に行はれて居る諺（ことわざ）の様に、よく其の国民の性情を表し出すものであります。国民の性情といふものは言葉の上にも、美術の上にも、風俗習慣の上にもあらはれて来る通り、かういふ言ひ伝への話の上にもちやんと現れて居るのであります。各国の子供の話には世界共通の点も沢山ありますが、またそれ〴〵各国の特性を示して居る所があります。（三二八―三二九頁）

時が移り、世態が革（かは）るに従つていろ〳〵変化したり、新分子が付加つたりして来るのであるが、今は日本上代の神話伝説はどんなものであつたか、支那思想印度思想の輸入と共にどんな伝説が出来たかといふことの大略を述べたのである。（三六一頁）

つまり、この論についても、身分や階級に関わらず共有されている日本国の説話（童話・伝説）の研究を通して、国民の特性を究明すること。そして、他の諸国との説話の比較についても、比較を通して日本の国民性と外の国民性と区別することに主眼がある(16)。矢張り、芳賀の説話研究の意義付けと、目的、方法は留学の前と後とで、そう大きくは変わっていないのである。つまり、別な言い方をすれば、ドイツ留学直前の段階で既に、芳賀の説話研究は確立を見ていたとも言えるだろう。

なお、芳賀のグリム童話、メルヒェン及びその研究の享受や、説話研究の方法習得をめぐっては、一八八三年から二五年の長きにわたって東京帝国大学でドイツ文学講師を務めた、文献学者カール・フローレンツ（Karl Florenz, 1865-1939）の存在もまた大きく拘わっていたものと考えられる。このあたりの問題については稿を改めて論ずることとする(17)。

注

（1）二〇一五年一〇月時点では、国立国会図書館にも所蔵は認められない。

筑波大学附属図書館、成田山仏教図書館に所蔵を確認した。

（2）茗渓会ならびに雑誌『教育』の刊行経緯については、茗渓会百年史編集委員会編『茗渓会百年史』一九八二年を参照。

（3）芳賀と教育制度、教科書の問題については、南方熊楠顕彰館・第四〇回月例展・熊楠とゆかりの人びと第二三回「芳賀矢一」展（二〇一四年一〇月一一日～一一月九日開催）の展示解説資料の「芳賀矢一と制度・教科書」（今枝杏子氏担当）に詳しい。

（4）本稿では、引用に際して、漢字の字体を現在通行のものに改めた。

（5）なお、教材として日本の童話・伝説を採用する試みは、文部省編輯局『尋常小学読本』一八八七年に既に見受けられる。

（6）山本康治「明治末から大正期における小学校国語教育へのヘルバルト派教育学の影響について」『東海大学短期大学紀要』第四七号、二〇一四年三月。なお、ヘルバルト派の教育学については、是常正美『ヘルバルト派教育学の研究』玉川出版部、一九七九年。山本正身「日本におけるヘルバルト派教育学の導入と展開」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第二五号、一九八五年三月。

（7）ハウスクネヒトとその門下生については、寺崎昌男・榛松かほる「史料・特約生教育学科とドイツ人教師エミール・ハウスクネヒト」『東京大学史紀要』第二号、一九七九年三月。寺崎昌男・榛松かほる「エミール・ハウスクネヒト研究」『日本の教育史学』一九七九年一〇月。仲新・稲垣忠彦・佐藤秀夫『近代日本・教科書教授法資料集成』第三巻・教授法書3、一九八二年。今野三郎「明治二〇年代のヘルバルト主義教育思想―ハウスクネヒト・門下生の著作の検討を中心に―」『教育学雑誌』第一七号、一九八三年三月。寺崎昌男・竹中暉雄・榛松かほる『御雇教師ハウスクネヒトの研究』東京大学出版会、一九九一年等を参照。

（8）南方熊楠顕彰館所蔵『明治十八年三月（第二学期）・東京大学予備門前本黌生徒及改正学科生徒試業優劣表』一八八五年九月、一七頁（「関連一八〇三」）に拠る。当資料は、飯倉照平・長谷川興蔵編『南方熊楠百話』八坂書房、一九九一年、二〇～二二頁に紹介されるが、該当頁の影印は掲載されていない。なお、同級生として他に、夏目漱石、南方熊楠、正岡子規、山田美妙らの名も見える。立花銑三郎について詳しくは、原武哲『喪章を着けた千円札の漱石』笠間書院、二〇〇三年。原武哲・石田忠彦・海老井英次編『夏目漱石周辺人物事典』笠間書院、二〇一四年の「立花銑三郎」条を参照。

（9）沢柳礼次郎『吾父 沢柳政太郎』冨山房、一九三七年、参照。

（10）この点、竹村信治の以下の論にも指摘がある。「今昔物語集と近代（上）／（下）―学術・小説・教科書」『国語教育研究』第四九号／第五〇号、二〇〇八年三月／二〇〇九年三月。「今昔物語集の明治」『説話文学研究』第四四号、二〇〇九年七月。

（11）中山淳子『グリムのメルヒェンと明治期教育学』臨川書店、二〇〇九年。また併せて、須田康之『グリム童話〈受容〉の社会学 翻訳者と読者の読み』東洋館出版社、二〇〇三年も参照。なお、このあたりのことと関連して、竹村信治08（注（10）参照）は、一八九五年に留学直後の上田万年が芳賀らと共に『帝国文学』第一巻第一〇（一八九五年一〇月）に於いて「俗謡」蒐集「広告」を出していることを指摘し、ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー（Johann Gottfried Herder, 1744-1803）の『民謡集（*Volkslieder*）』（一七七八―一七七九年）の影響を指摘する。このあたりの問題については、この時期に上田敏らを中心に「俗謡」「民謡」をめぐる論議が活発化していることとも、大きく関わっているものと考えられる（品田悦一『万葉集の発明』新曜社、二〇〇一年）。

（12）朝日新聞の高木敏雄による「民間伝説及童話」の連載に先立つ、呼び掛けの記事にも「民間伝承及び童話が国民文学の研究に欠く可からざる事（中略）往年文部省に於て各地方に通牒して材料を蒐集した事があつて整理を芳賀博士などが企てられ近来は文芸委員会の一事業ともなつてゐる其次第であるが」（一九一一年一二月一八日「東京朝日新聞」朝刊、第六面）と見える。このあたりの問題については、長尾洋子「『俚謡集』再考 うたの〈方言〉化とやわ

らかな統制」『和光大学表現学部紀要』一〇号、二〇一〇年三月。権藤敦子「高野辰之と俚謡収集――その背景をめぐって――」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第一部、第五九号、二〇一〇年一二月。権藤敦子「明治後期における俗謡調査――邦楽調査掛の事例を中心に――」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第一部、第六〇号、二〇一一年一二月。金廣植「「韓国併合」前後に帝国日本と植民地朝鮮で実施された民間伝承調査」神奈川大学『国際常民文化研究機構』第四号、二〇一三年一月を参照。

（13）一九〇三年頃に『攷証今昔物語集』に取り掛かり始めたことは、同書上巻の凡例に「本書底本の書写終つて後、悉皆之を校訂せられたのは友人石橋尚宝氏の努力で、明治三十六年の春に始まつて」（大正二年五月・纂訂者しるす）、或いは同書下巻の緒言「本書の起稿は約十八九年前でもあつたらう」（大正十年一月・芳賀矢一しるす）に拠る。同書について、小峯和明は『南方熊楠大事典』勉誠出版、二〇一二年、「芳賀矢一」条で、『攷証今昔物語集』編纂は実際には坂井衡平によるところが大きかったかと推測する。しかし、西村眞次の回想で、芳賀が「僕は何一つ自分の仕事として碌なものはないが、今昔物語の研究だけは大成したいものだと思つてゐる」（『国漢』第三〇号、一九三六年）と述べていたことを踏まえると当書はやはり飽くまでも芳賀が中心として成ったと見るべきであろう。芳賀矢一「今昔物語中の犬」（『帝国文学』巻一六第一、一九一〇年一月）に於いても、冒頭で「戊の年といふので、諸新聞等も例によつて犬の絵や話を掲載する。多忙で外の事を調べる暇が無いから、今昔物語にある犬の話に就いて一言しよう」とあり、即興で執筆できる話題が『今昔』のことであったことも、芳賀がこの時期、如何に『攷証今昔物語集』編纂に力を入れていたかが窺われよう。なお、高木敏雄も『郷土研究』創刊号（一九一三年三月）の「今昔物語の研究」の冒頭において、「「今昔物語」は日本に於ける最大最古の物語集として、日本の物語文学に最重要な位置を占めてゐるばかりでなく、世界に於ける物語文学界に於ても亦最重要なるもの、一つである」と述べ、芳賀と同様の評価をしている。しかし、一九〇五年以前の高木の論考では、例えば「日本説話のインド起源に関する疑問」（『帝国文学』第七巻第三、一九〇一年）という、現代の研究者にとってみれば真っ先に『今昔』が取り上げられそうな論考に於いても『今昔』への言及は全くない。また、「論説：説話学者としての瀧沢馬琴」（『龍南会雑誌』第一一一号、一九〇五年五月）に於いても、『今昔』に言及されはするものの、滝沢馬琴の引用書の一つとしてしか扱われていない。したがって、芳賀の『今昔』への着眼は、実に時代を先駆けたものであった。

（14）小峯和明「南方熊楠の今昔物語集――説話学の階梯・明治篇――」『季刊文学』八巻一号、岩波書店、一九九七年一月。渡辺匡一「V享受・研究・創作5明治・大正期（一九二〇年代まで）」『今昔物語集を学ぶ人のために』世界思想社、二〇〇三年。竹村信治08／09（注（10）参照）など。

（15）当該論考は『芳賀矢一選集』第三巻、一九八五年にも収録される。なお、同書の当該論考の解題には「「教育」明治三十三年六・七月に発表された「日本童話の淵源」と脈絡を等しくするものである」と見える。

（16）これは芳賀自身の〈文献学（フィロロギー）〉と共通した論の展開であると言える。

（17）『説話文学研究』第五一号（二〇一六年刊行予定）に掲載予定の、拙稿「国文学研究史の再検討―『今昔物語集』〈再発見〉の問題を中心に―」に於いて、この問題を取り上げる予定である。なお、上田万年「普魯士亜国の師範教育に就て」（『教育』第一号、一九〇〇年三月、七頁）には「それで茲に申上げます事実は、凡て独逸国の高等学校に関する第二十年報、即ち千八百九十九年乃至千九百年我が明治卅二年乃至三十三年に当りまする分に拠りました。これは小生の益友文科大学の教師（ママ）文学博士フロレンツ君が、今年独逸から帰られまする折の土産として小生に贈られました書籍であります。」という記述が見える。上田とフローレンツの間で、教育学に関して情報、意見交換をする場面もあったことが窺われる。

Ⅱ　翻刻　Ⅱ

【凡例】

一、底本は、成田山仏教図書館所蔵本に拠った。

一、底本は、漢字平仮名交じりの表記で、平仮名について、濁点の振られるべき箇所に振られていない場合があるが、敢えて濁点を補わず、出来る限り底本に従った。

一、誤脱と見られる箇所も敢えてそのまま翻刻し、右傍に（ママ）と示した。

一、漢字の字体は、現在通行のものに改めた。

一、底本には傍点の付された箇所があるが、これも可能な限り底本に従って付した。

一、改行も底本に従った。なお、底本は改行の際に一字下げを行っていない。

一、底本は各頁、上下段の二段組の体裁を採っている。頁数と、上下段の別は、底本該当部分の末尾に当たる箇所に、〇〇頁△段という形で示した。

【本文①：芳賀矢一「日本童話の淵源」『教育』第四号、一九〇〇年六月三日】

日本童話の淵源

芳賀矢一

童話は国民文学の一種なり。いつの世如何なる人の作り出でけんとも知らず、父母、祖父母、曽祖父母より聞伝へて、子孫、曽孫、玄孫に語継ぎ行くものなり。一人の作者の詩想によりて構成せられたる著作にはあらずして、国民全体の口のはに残れる伝説なり。代を重ね年を歴る侭に、幾多の変遷は受けながち（ママ）、一貫せる趣味は長く其生命を保てるものなり。儒者といはず、僧侶といはず、武人といはず、士農工商何人といへども、幼時慈母の手に抱かるゝ時期に於ては、必この伝説を耳にせざるは無し。文学の研究者は勿論、教育の任にたづさはるもの、之を等閑にして可ならんや。独逸人ヤコブ、ウイルヘルムのグリム氏兄弟は、善く国中の父老に聴きて、全国の童話を蒐集するに六年の長日月を費せりといふ。近来我国の教育者、往々童話の価値を認め、童話読本の世に出づるもの亦随つて多し。これ実に喜ぶべき現象といふべし。余や浅学寡聞、こゝに二三の童話に就きて其淵源の一端を記さんとおもふは、偏に童話研究の益盛ならんことを望めばなり。

我国に行はるゝ童話を網羅せば、数十種に上るべく、其性質より之を分類せば、亦数種に分つことを得ん。若し尚グリム氏の如く、全国各地に於て古来の伝説を集めんには、新奇なるもの亦頗多かるべし。然る後之を古史風土記等に徴し、其由来を知り、又之を他国の童話と比較し評論せんは、最趣味に富み且有益なる事業たるべし。今は其最普通なるもの、桃太郎、猿蟹合戦、かちかち山、舌切雀、花咲爺の五話を挙ぐるのみ。従来我国の童話に就きて研究せるもの、管見の及ぶところにては、曲亭馬琴の燕石雑志喜多村信節嬉遊笑覧中の一部及黒沢翁満の童話長篇はしがきあるのみ。

馬琴は最委しけれども、いたく支那の伝説に偏（ママ）せり。翁満は童話考を著さん所志ありといへども、成就せりや否や。はしがきの文、簡にして又神代紀に僻したり。今主として三書の説を折衷し、間に私見を加ふ。

我国はいふ迄もなく、東洋の一古国にして、特殊なる神話を伝へたり。其神話は紀記二書に載録せられたる外、風土記等にもあまたの断片を遺せり。童話の淵源に遡るにあたりて、幾分か神代紀中の事実に帰着すべきは理の当然なれども、童話の性質として常に口頭に伝唱せらるゝが故に、絶えず多少の変更を受く、漢土の文化を蒙ること大なるに及びては、いつしか其伝説をも加味すべし、枝葉の差異は姑く之を措き、今日の童話は古今内外の種々なる伝説の総合し、変形したるものたる事論なし、制作の時代も亦定むべからざること勿論なれども、或時代に於て特に其顕著なる時代的印象を与ふることなしといふべからず。童話の発端に、爺は山へ柴刈、媼は川へ洗濯といふは、嬉遊笑覧に異制庭訓を引いて、甚だ古き事なりといへり。昔々より伝へ来れる話とせんに、爺媼を［二二頁上段］出すは頗適当なる事たり。催馬楽奥山に、「おく山に木きるやをちきをやはけンづるま木やはけンづるきけンづるをぢ」と歌ひ同じく奥々山に、「おく山に木流すとき、るをぢきやときやときをやはけンづるま木やはけンづるきけンづるをぢ」と歌へるも、関係あるにはあらじか。紀に塩土老翁（しほつちのをぢ）あり。ヲヂは老翁と釈すべし。万葉集の竹取翁、竹取物語の造麿、皆老人を引合に出せり。古話と古老と其釣合のよきを悟るべし。結尾には猿の尻は真赤いなと語りし由。こは猿の尻は赤しといふ事と、「先づかくの如し」といふ事を、「まッかいな」といひて兼合せたるなり。尻なれば結尾に適当せり。今日の童話には発端のみ昔の俤残りて結尾は早く失はれたるが如し。徳川の初に至りては已に童話の刊本も出でたれば、今日の童話は大体の結構に於て足利末頃に成形せしものと思ふは非か。こは尚各条に就きていふべし。

（一）桃太郎

桃太郎の鬼が島征伐は、翁満「少彦神のかゞみの舟に乗りて伊那佐の小浜に流れより給へりけんが後に粟がらにはじかれて常世の国に渡り給ひぬといふ故事に、伊邪那岐命の桃の実もてよもつ軍を逐ひやらひ給ひし故事を取り交へて、語り伝へたるものとこそ聞ゆれ」といへり。桃を以て黄泉の神を退くること、記紀に見えたれば、これ我が太古の神話思想なり。支那にも同様の思想ありて、本草綱目に桃仁桃花の鬼疳を愈（ママ）やすことをいへり。又風俗通に、東海度朔山、有大桃樹、盤屈三千里、下有鬱塁神荼、以食凶鬼、名曰蟠桃、といひ、述異記には日本国有金桃、其実重一斤といふ。風俗通にも東［二二頁下段］海といふを見るに、支那以東の思想たりしか。漢武内伝西王母の仙桃の事亦併せ思ふべし。桃太郎は正しくこの桃の擬人（パルソニフアイ）せられしなり。水中の桃の実より産れ出てたりとなせるは、桃太郎の人物を一層面白からしめんか為めに、自然に考へ到るべき順序なれども、類似の伝説亦尠からず。述異記に、夜郎県の女子紗

を浣ひて三節の竹を得、竹を剖りて男子を得たる話あり。万葉集の柘枝仙女の話にも似、竹取物語のかくや姫にも似たり。竹取物語の淵源と称せらるゝ宝楼閣経の話、幽冥録の橘果中に二人の叟ありし話、皆同様の思想なり。然れども其最之に近きは姫瓜の話なるべし。姫瓜の話は、嬉遊笑覧に「老父老嫗あり、老父は柴を刈に山へ行、老嫗は洗濯に河へ行たりしに、瓜流れ来けれは、嫗拾ひ取て家に帰り、老父に喰せむとて割たれば、内より小き姫出でたり。いつくしき事限りなし。夫婦喜びて一間の内におく。姫生たちて機織る事をよくして、一間の外に出ず。ある時庭の木に鳥の声して、瓜姫の織たる機の下に、あまのじやくが乗りたりけりと聞えければ、夫婦怪しと思ひて、一間の内に入て見るに、あまのじやく瓜姫を縄にて縛りたり。夫婦驚きて之を助け、あまのじやくを縛り、此女薄の葉にて引かんとて、すゝきの葉にて切殺しぬ。薄の葉のもとに赤く色つきたるはその血の痕なり」とあり。信節も桃太郎の話といづれか先なるか本づく処は竹取物語の翁などにやといへり。姫瓜を弄ぶ事は枕草子にも見えたれば、古き遊なる事知るく（ママ）、鳥の鳴きたるあまのじやくの事は、神代紀に天探女無名雉か杜の梢に居るを見て、天雉彦に告げて射殺さしむる事に淵源したりとすれ［二三頁上段］ば、この話の由来亦甚遠し。誠に桃太郎と一対の伝説といふべし、両話の根源は竹取に在るか。竹取かへりて両話に胚胎せしか。今俄に知るべからず。姫瓜の鳥、無名雉に似て、桃太郎の従者にも同じく雉あり。使者たる無名雉の粟田を見て帰り来らざりきといふ事、黍団子を賜はりしことに形を変へたり。孔子家語に、孔子侍座於魯哀公、設桃具黍、哀公曰請用、仲尼曰先飯黍而後噉桃、左右皆掩口失笑云ゝとあるより、粟と黍とは転換せしか。猿の事は燕石雑志に、猿の人に従ひし事は和漢その例尠からねば、毛挙に暇あらずといへれど、余思ふに神代紀の猿田彦命か嚮導し給ひしをいふに非ざるか。犬は後世には最人類に接近すれども、神代紀に見えず。馬琴のいふ如く畑時能が犬を使ひて城を抜けるなどより思寄りしならん。（馬琴の八犬伝にも八房の犬軍功あり）桃に犬の縁あるは、馬琴李至か桃花犬の歌に、宮中有犬桃花名絳繒囲頭懸金鈴云ゝといひたれども、さまでは如何にや。

鬼の思想は奈良朝以後盛に行はれて、平安朝の今昔物語等には無数に多し。保元物語に、為朝鬼が島に押渡りて鬼を平げ、隠簑隠笠以下の珍宝を得たることを載せたり。隠簑隠笠の事中古にかくれみの、物語あり。狭衣等にみえたれども、今伝らず。其事尚後拾遺集の歌に見え、夫木集にもいづ。打出小槌も平家物語等に見ゆ。為朝の武勇談は広く人口に膾炙しけん、足利時代の御伽草子に、御曹司島めぐりあり。狂言の首引に為朝鬼と首引して勝つ事を作れり。鬼に関する狂言は、其他にも多し。鬼の宝も其中に見えたり。桃の鬼気をやらふ上古思想はこゝに至りて為朝の鬼退治と変化したりけ［二三頁下段］り。足利の世には倭冠（ママ）の明国を侵す事絶えず、大内家の如き中国九州等の大名も、兵船を造りて南島侵掠せん企屢々あり。対外遠征の冒険心大に発動せる時期なり。桃太郎が武勇なる

童話は。（ママ）恐くはこの頃に成りしならん。桃太郎の名もこの頃出来しなるべし。豊公か征韓の後もこの後に行はれしなり、桃太郎と一対の話なる姫瓜の話は、天和貞享頃の絵にも見えて、信濃国人は今も尚語る由信節いへり。徳川の世も武士道を重んじて、男子の教養は女子よりも之を大切にしたれば、女子の姫瓜の話いつしか絶えて、武勇なる男子の遠征談は今日迄保存せられしなり。

（二）猿蟹合戦

猿蟹の話も亦武勇談なり。桃太郎は草木の実なれども、全く人に擬化せられたり。猿蟹は然らず。桃太郎の従者には雉、猿、犬等の禽獣あり。猿蟹には蜂卵杵臼の如き、軍略に与るもの、多くは非情物なるもをかし。翁満は之をも神代に起因すとし、「日本紀の神代の巻なる海幸彦と山幸彦と互に幸を取りかへ給ひしより、山幸彦にいたく責められて、海の神の力を借りてつひにいみじくたしなめかへし給ひぬといふ古き伝へを、海の物と山の、物とにおほせて、をかしく語り伝へたるにやあらむ」といひ、又猿田彦（ママ）の神のひらぶ貝に手をくひ合せられて、海に溺れて神去りましつとある古事記の伝へなどをや思ひよせけむなどもいはゞいふべし」といへり。これもとより一理あり。必この話の胚心ならん掃部寮は蟹守りのつかさなり。上古の人蟹を恐れしこと以て見るべし。蟹の貌の異形にして横行する態如何にも奇怪なり。上古家屋建築［二四頁上段］の麁造なりし時は、大蟹の鋏を立てゝ群がり来らば、如何ばかり怖ろしかりけん。日本霊異記に蟹の蛇と戦ひて、女人の難を救ひし話二つまでも載せたり。さる恐しき物ながら、いつも人の難を救ふ方に取られ、悪方に認められざるは、猿蟹の話亦同じ。こはかの海の幸の方なる故にや。支那人も蟹を恐れきと見えて、玄中記山海経等に非常なる大蟹ある由記せり。馬琴は李石が続博物志を引きて、大蟹の虎と闘ふを我国にて猿にかへたるなりといひ、翁満はさる事迄を引出でんは古心にあらじと排斥せり。虎に代ふるには熊狼の類を以てすべし。猿を以てしたるは猿田彦の故事と結合したるにもやあらん。尚考ふべきは馬琴が蟹録を引きて山獰といふもの、獰を食ふことを言へる事なり。山獰は猿の類にやといへり。これ等の伝説と、神代紀のと相併合したるものと見做すべきか。

山獰の蟹を食ふを防ぐには、竹を以て火中に付け、爆発せしむるに在りといふ。馬琴はこれ即卵の火中より飛出づるに似たりといへり。余が幼時、父母より聞ける話には、栗の実火中より飛出で、猿を驚かしたりといへり。之に就きて思ふに、こは日本紀欽明天皇の五年の条に禹武邑人（佐渡）椎子を拾ひて、煎食はんとせしに、灰裏より二人の男あらはれ出で、火上に飛騰すること一尺許、時久しく相闘ふ。人怪みて之を庭に置くに、相闘ふこと始の如しとある古伝説の残れるに非ざるか。果実を火中より迸出すること、実に霊あるが如し。上古の人の実際に驚きし事の、いつしか猿を驚かす事に変化せしなり。爆発の力は卵の方更に勢よきを以て遂には卵と変［二四頁下段］ぜしならん。蜂の猿を刺しゝは、鈴鹿山の強盗を螫して水銀商人を救ひしこと、蜘蛛の巣にかゝりしを救はれて戦場に

恩を報いしこと、今昔物語十訓抄に見えたり。蜂は常に義の為めに戦ふものなり。軍書の蜂起などの字も参考すべし。蜂群に触るれば、忽其復仇にあふ事、吾人の常に経験するところにして、強ちに今昔物語、十訓抄、に起因すといふにも及ばず、蜂は神代紀にも出でたり。杵と臼との義戦は、馬琴の考に公孫杵臼のその友程嬰と謀りて、趙氏の孤を輔けしを象りたるなりといへり。さもあるべし。之も軍書に出でたり。馬琴は又蟹の握飯を与へて惜まざりしは、朱登が張敞に蟹醤を贈りしに似たりといひ、柿の実を出せるは蟹と併食して害あるによるといへり。然れども之はあまりに言過ぎたり。山猿の柿を好むことはいふ迄もなし。蟹の泡を吹くに、握飯を抱ける貌あり。俗にも「蟹がおまんまを焚く」といへば、之によりて付加へたるなるべし。

山幸海幸の争、猿田彦と海貝との争は、幾種の伝説を交へて猿蟹の合戦とはなれり、蟹の堅甲を戴き長鋏を有せるは、武人としては最適当したり。蟹の戦闘すること日本支那に共有なる思想なり。平家の没落せし海には、今も平家蟹ありと伝ふるにあらずや。この話の復仇を以て骨子とせるは、亦恐くは足利時代の印象を帯びたりといはん。復仇の思想、鎌倉以後已に行はれて、足利に至りて頗盛なり。謡曲中の曽我物語、壇風、放下僧等を見て之を知るべし。おもふにこの話も亦桃太郎と同じく、足利時代の武士気質の下に構成せられしならん。（未完）二五頁上段

【本文②：芳賀矢一「日本童話の淵源（承前）」『教育』第五号、一九〇〇年七月三日】

日本童話の淵源（承前）

芳賀矢一

（三）かち〳〵山

かち〳〵山、古くは兎の大手拇（ママ）といへり。猿蟹合戦と同じく、一種の復讐談なり。この童話の根源は、疑もなく神代紀因幡の白兎より出でたり。信節、翁満皆之に気付けるに、馬琴はふと之を忘れたりとみゆ。但し神代紀なる白兎は狡獪なる性質を帯びて、童話なる兎の忠実なると相反せり。神代紀に於ては、兎は失敗者にして、童話に於てはかへりて勝利者なり。これ狸てふ思想の入来りて、兎に代りたるなるべし。狸は神代紀中に所見なし。禽獣の怪をなす思想、推古の三十年、狢あり人に化けたるを最初とす。支那にては古くより狐狸相並びて、唱へられたれば、支那文化の輸入と共に我国に入来れり。但し平安朝の今昔物語には狸の話二三見えたれども尚甚尠し古今著聞集に至りては、変怪の部大半は老狸の怪一七頁下段なり。狸の流行は狐よりも遅しといふべし。狸の化方多くは老僧に化し、結局人目を驚かすに止まりて、狐の如き邪淫残忍の性なし。茂林寺の文福茶釜なども、参考すべし。狐の慧敏なるに比しては、到底魯鈍なるを免れずして、寧滑稽的なり。かち〳〵山の童話に於て、老媼を撲殺するが如きは、稍や残忍なるに似たれども、便佞利口の術なくして、後難にも顧慮せず、直に老媼を打殺したる、何処とな

く樸訥なる処あり。兎に欺かるゝこと数回に及ぶを以ても、其愚鈍なるを証すべし。童話の兎は忠実者として現されたれども尚狸を欺くこと再三に及べるは、神代紀なる狡獪なる性質の残れるならん。愚鈍なる狸の思想一たひ導かれて、白兎の性質忽之に負せられ虚言つき上手の白兎は天晴忠実者となり済しぬ。

総じてこの話には、残忍なる事多し。狸の老婆を殺すを始として、其羹を老翁に進むるが如き、殆我国民の夢想せざる所なり。ついでかち〳〵山に狸を焼討にしたる、又薬売となりて更に之を困頓せしめたる、最後に土舟に載せて、之を溺死せしめたる、些々たる童話の中、殺害の場合あること三度に及び、多くはだまし討を以て不意に其虚に乗ずる方法によれり。これ顧ふに太古の伝説にはあらじ。神代紀に於ては、兎の鰐に皮を剥かれて泣悲みたるを、大名持の神水門の蒲黄を取りて其上に輾転せよと教へ給ひ、兎之によりて再愈（ママ）ゆることを得たり。苦痛せしむる目的を以て、蕃椒の膏薬を与へし等の事かつて見えず。

兎の田翁の喪を問ひしは、孝経列伝に。蔡邕母を喪ひて家側に居りしに、兎其室の側に馴擾すとあるに似たりと馬琴いへ一八頁上段り。膏薬をつくりきといふ事も、月中の兎薬を搗くといふ事をおもひよりしならんといへり。

要するにこの童話は、神代紀の白兎に起原したれども、亦いたく支那伝来の思想を交へたり、金を鑽りて火を出し、火を以て木を焼き、水に浮べる土舟を以て、（ママ）、水に溺れしむるは、木火土（ママ）金水の五行を悉く備へたり。大体の結構は友情に本づく復讐なれども、其方法はあらゆる詭計を用ひたり。猿蟹合戦の単に伏兵を用ひたるものと同じからず。これ一方に於て足利氏戦国時代の状態を反映せるものにあらずや。之より先き、新田義興が六郷川の最期は、正しく土舟の難に同じきをおもふべし。この童話残忍にして騙詐の術多し。他の童話に比して教育上の価値幾分か劣れるなるべし。

（四）舌切雀

前に挙けたる三童話は、いづれも武勇復仇の談にして、童女よりも童男に適せり。其中に含有せる道徳は、義勇これなり、舌切雀、花咲爺に於ては、慈仁の訓あり、物羨の誡あり、之を前の三話と対照するに、比較的に女子的なり。こは宇治拾遺物語に出でたる腰折雀、恩を報ゆる話よりいで、由来頗新しきものなり。総じて因果応報めきたる話説は我上古には絶無なり。唯神代紀一書曰の中に彦火々出見尊の河雁を救ひて善報を得給ひし一話あるのみ。恐くは仏教渡来以後出来し伝説ならん。欽明天皇紀に、秦大津父といふもの、狼を助けて立身せしこと見えたるは、同じく仏教とともに伝来せし思想ならん。日本霊異記に至りては同種の談枚挙に暇あらず。さてかの宇治拾遺に載せたる雀の話は、今の舌切雀と大同小異に一八頁下段して、年老いたる女の、腰骨折れたる雀を見付けて、愛育せしに、日ならずして全愈（ママ）し、うれしけに立去りたるが、少し程経て、瓢の種一ッ喰はへて帰来れり。老女其種を取りて、蒔くに、瓢生ひいて、大なる実あまたなりたり。之を切あけて見れは、

白米あり、大に驚きて他の器に移すに、匏の中又忽に満てり。取れども〳〵尽きず、老女は豊なる人になりぬ。隣家の老女之を羨みて、此度は自ら石打ちて、雀の腰を折りしばし養ひて放ちやりしに、数日の後瓢の種を含み来ること前の如し。之を植うれば、匏又出来たり。熟するを待ちて之を割るに、蜂虻等種々の虫這出で、婆を喰殺したりといふ話なり。腰折れたりといふ事、小供に分り難ければ、洗濯の糊を盗みて舌を切られたりと改めしならん。小児の悪戯を誡むる意も加はりしにや。雀の躍るといふ事は、雀躍の語あるにても知らる。諺にも雀百まで踊忘れずといへり。述異記に、周成王元年貝多国人献舞雀周公命返之とあり今の童話雀躍の一条を加へて、一層の興味を加へたるなり。歌舞伎の雀躍は、舌切雀以後の事なるべし。匏の代りに葛籠とせしも、理解し易からしめたるもの、宇治拾遺の蜂虻等はいつしか鬼三目入道の化物と代れり。

宇治拾遺の雀の話、亦本づく所あり。捜神記二十巻に愍黄雀得報とて、弘農の楊宝黄雀の鴟梟に搏（ママ）たれしを救ひ、其善報によりて四世三公に隆りきとある話に拠れるが如し。この事馬琴、信節皆しかいふ。果して然りとすれは、純然たる支那伝説なり。匏中より米を得たる話も、信節は宋の郭彖撰睽車志に孝子米の袋を得てつかへども尽きざる話より出てたるに 一九頁上段 やといへり。無尽蔵に物を得る事は、打出小槌等其他にも類多く、外国の童話等にも類似の談尠からず。蜂虻百足等の這出でしは、翁満古事記のへみの室屋むかての室屋などいへるも、自ら通ひていみじき古心なるなりといひ、大祓詞のはふ虫の禍の義なりとせり。馬琴は雀の松原といふ絵巻物ありて、神代紀天稚彦の故事見えたりともいへり。これらより推すに、強ちに支那伝説とのみもいふべからず。雀をかひて育つる事は、源氏物語若紫の巻に、いぬきが逃しつる雀あり。夫木集に土御門内大臣「思へたゞ雀の鷂をかひおきて育つる程は悲しきものを（ママ）とあり。中古以来雀を飼ひしこと多かりしかばはてはかゝる童話も出来しならん。

この話宇治拾遺のと大差なしとすれは、足利時代に成りしものとは言ひ難し。然れどもこゝに注意すべきは、足利時代に発生し御伽草子中には物羨を誡めたるもの最多き事なり。こは宇治拾遺にも、腰折雀の外、鬼の瘤取の話等もありて、足利以前よりあれども、足利には有名なる福富草紙を始として、殊に多し。下上を尅して利唯これ争ふこの時代の状態俄分限の多かりしは事実なり。物羨を以て唯一の訓誡とせるも故なきに非ず。しかのみならず、前にいへる雀の松原の絵巻物は勾当内侍の作にて、馬琴はいつの代の内侍にやと訝りたれとも。黒川春村翁の古物語類字抄によれは、後柏原院の勾当内侍の作に雀の物語ありて、雀の松原と同物と見えたれば、前の宇治拾遺の話をこの頃殊に喜ひて語り出てしならんと思ふは当れりや否や。

（五）花咲爺 一九頁下段

花咲爺の話に、物羨を誡めたること舌切雀に同じ。児童に最親しき犬の話あれば、犬の童話亦無かるべからず。況んや犬の恩を知るこ

とは、東西共通せる思想なるをや。馬琴は今昔物語に、参河国郡司が妻の飼犬鼻孔より絹糸を吐きし話、この童話の本源ならんといへども、さりとては余りに痕跡少し。恩を知るといふのみならば、其他にも犬の話はいくらもあるべきをや。衣の裾をくひて知らせたりといふ事、東齋随筆に「御堂関白殿法成寺を造らせ給ふ時、日毎に渡らせおはします。其頃白犬を愛して、飼はせ給ひける。御堂へも毎日御供に参りけり。或日門を入らせおはしましけるに、御前に進みて、走りめぐりて吠えければ、立止りて御覧ずるに、させる事無かりければ、猶歩み入らせ給ふに、犬御直衣の襴をくひて引とめ奉れば、如何にも様あるべしとて、榻を召して云々其処を掘らして御覧ずるに、土器を打合せて黄なる紙ひねりにて十六字にからけたるを掘出せり云々（ママ）とあり。童話の趣大に之と相似たる点あり。

この話の福富草子に似たるは、信節馬琴ともに心づけり。福富草子は、屁ひる男何某中将殿に召されて、幸福を得たるを、隣の貧人羨みて、おのれも之に習ひしか、屎まり散らして打懲らされて還り来りきといふ話なり。臼の中より糞の出てたりと伝へたるも、其痕跡を止めたるに非ずや。打擲せられて血にまみれて帰来るを、其妻の見て紅衣を着て帰りたりとおもへる様、福富草子に同じ。福富の草子あまりに尾籠にて、児童に話すべくもあらねば自らかく変化せしか。放屁の術を以て黄金を得るは、実に枯木に花を咲かす術なり。枯木に花［二〇頁上段］の咲くといふこと、千手陀羅尼経より出で、続詞花「雪ふればちかひたのもしはつせ山枯れたる木にも花咲きにけり」千載「たのもしきちかひは春にあらねどもかれにし枝も花ぞ咲きけり」新続古今「梅の木の枯れたる枝に鳥の居て花さけさけといふぞわりなき」など、多く見えたり。新続古今なるは、清水観音の歌なりといへり。馬琴も楊柳観音の事より出でたるにやといへり。枯木花を生すといふこと、かばかり多くいひ慣れたる事なれば、屁放る術を之にて言ひかへしならん。平賀源内の風来六々部集放屁論には、放屁の術を見せ物にして、金を儲けたる男を花咲男といへり。之をしも花咲男と名つけしは、時の人福富とこの童話との関係を知れりしか。又は無用を転じて有用となすを以て花咲爺より思寄りて、偶然にしか名づけしか。孰れにしても福富草子との関係上の推測を助くるに余あり。

これはた舌切雀と同じく後代の伝説なるべし。福富草子より出でたりとすれば亦足利季世のものと見んか。

以上五種の童話につきて、前賢の考証を参酌し、余か意見を交へて、其関係とおほしきを叙述せり。今之を通観するに、其爺媼を以て始まるは一なり。いづれも田夫野媼にして、顕貴の人にあらず。山に樵し、川に濯ひ、麥を舂き、餅を搗けり。犬、猿、狸、雉、雀、蜂、蟹、臼といひ杵といひ皆田舎の生活に日常接近するものなり。淵源するところ、遠く神代に発し、印度支那の伝説を交ふると雖、代々の変更を経て、全く国民の家庭に同化せられたり。全国行はれざる隈なく、既住百千年、日本の国土に生れし幾億万の民衆は、悉くま

づこの文学 二〇頁下段 に養育せらる。其中に道義あれども、道義は其目的にあらず。秩序なく、条理なく、何等の理由なくして、趣味饒多なること又他の文学の及び易からざるところなり。我国一切の童話を網羅し、之を研究し、殊に他国の童話と比較せんは、如何ばかり趣味あらん事業ぞ。時事新報社は、過くる頃全国よりお月さま幾ッの童謡を蒐集せり。これ亦疑もなく、童話の断片なり。かゝる類尚多からん。あはれ新聞にもあれ、雑誌にもあれ、全国の童話を蒐めて、今後大に童話研究を起さんかな。（完結） 二一頁上段

【付記】当資料の閲覧にあたり成田山仏教図書館、ならびに同館司書の大木雅雄、飛田敏秀両氏には大いに御世話になった。また、南方熊楠顕彰館にも資料閲覧の折に大変御世話になった。心よりここに御礼申し上げる。なお、本稿は北京市社会科学基金項目「『今昔物語集』的東亜比較文学研究」（項目番号14WYC058）、及び清華大学人文社科振興基金研究項目「故紙沈香『今昔物語集』与日本外来文化的受容研究」（項目番号2014WKHQ009）の成果の一部である。